地質調査技士に合格して

日栄地質測量設計（株）
今泉　貴之

〈はじめに〉

入社当時「地質調査とは何だろう?」という想いからスタートして、はや、足掛け4年が経ちました。

当時を振り返ると、業務の打ち合わせの時は勿論のこと、現場に於いても、「何をしたらよいか。」、「何処をどう見ればよいか。」、「何を聞けばよいか。」など、右も左も分からず、戸惑うばかりで、とにかく「仕事を早く覚えたい」という気持ちだけで無我夢中だったと記憶しています。

仕事の面のみならず社会人としても、日々、新しい事への挑戦、発見、迷い、失敗、矛盾と葛藤など、さまざまな想いが交錯しながらの連続でした。

最近では、馴れたせいか（横着?）、少しは物事を客観的に見れるようになり、仕事の上でも、ようやく地質調査業務の流れが分かるようになってきたと言ったところでしょうか（?）。特に、現場においては、オペレーターの方々とも上手くコミュニケーションも取れるようになり、現場を比較的スムーズに進められるようになりました。

そんな中、業務に携わる上で様々な資格取得が必要とされている昨今、私自身も「地質調査技士」の資格取得の必要に迫られたと言ったところでしょうか。上司から資格取得に関する試験のお話があり、戸惑う想いがあるものの、自分自身、仕事を含めて、「今の自分のポジションを確認する意味でも!」という気持ちで受験に挑戦しました。

〈受験へ向けて〉

受験にあたっては、まず、試験のための事前講習会に参加し、試験の傾向と対策について受講しました。この講習会に参加すると試験で加点されるというのもあるせいか（?）、受講される参加者は非常に多く、また、年齢層が幅広いことに驚き、改めて資格取得の困難さと業務に携わる上で資格取得が必要とされているのかと痛切に感じました。

その後、過去に出題された問題とその講習会のテキストをベースにして、自分なりに筆記問題の対策にあたりました。

現場に関連する問題についても、今まで試行錯誤の連続であった体験を思い出しながら、また、先輩やオペレーターの方々に経験談を交えた話を聞くなどして進めていきました。

〈受　験〉

試験当日は、予想以上の受験者数に驚きましたが、自分自身は、思った以上にリラックスできており、「今までやってきたことを十分に出し切れればな」という想いで、試験に望みました。

試験は、午前中に筆記試験、午後に口頭試験となっており、午前中の筆記試験に関しては、幾つか解けない問題もありましたが、勉強の甲斐あってか、まずまずの出来で終えました。

午後の口頭試験は、試験官2人に対して受験者1人の形式で行われており、これには、自分の順番を待つまでの時間、私を含めて受験されているみなさんも緊張が高ぶる瞬間だったと思います。

試験は、緊張しながらも自分が経験してきたことを踏まえ、何とか率直に意見を述べることができました。

ここで、口頭試験で出題された問題を幾つか御紹介します。

・傾斜地における運搬及び仮設方法について
・柱状図判読
・任意の地盤条件におけるサンプリング方法について
・原位置試験の種類とその方法及び留意点
・経験した業務に関する質問

試験を終えてから合格発表までは、期待と不安が入り交じり混沌とする毎日でしたが、合格が知らされた時は、歓喜と感謝の気持ちと

同時に仕事に対する責務という思いがしました。

〈今思うこと〉

地質調査に従事して思うことは、仕事の範囲が多岐にわたって広いこと、時間を重ねる毎に、その難しさ、奥深さをひしひしと感じてくること、より多くの経験が必要であること、その反面、非常にやりがいのある仕事であるということです。

今回私は、地質調査技士資格検定試験に合格した訳ですが、今後も日々精進し、地質調査技士の重み、そして社会人としての責任を自覚し、初心を忘れずに、一技術者として仕事に取り組んでいきたいと思います。

最後に御指導頂いた職場の方々をはじめ、協力会社の方々へ感謝の意を表したいと思います。

新協地水株式会社
技術部地質環境課
澤内　知子

8時30分～17時30分というのが、我が社の規定する勤務時間である。

私の場合、だいたい時間ぴったりに出社し、忙しくなければ時間ぴったりに帰ることにしている。

「だって、1日8時間労働って法律で決まっているでしょ。」と言い放つのが、最近のマイブームである。ただ実際、そんなに上手く仕事が片付いてくれることは多くない。自分自身の勉強不足に対する反省はあるが、どこかでさぼりたいと思っている心が、私の仕事の遅さに逆拍車をかけているのかも知れない。

私の現在の仕事は、規模は小さいが、各調査の現場代理人をしながら報告書のまとめまでなんとかやっているというところである。調査内容に伴った悩み以外に、仕事に対するやりがいや適否などつい複雑に考え込んでしまうことがある。

そんな中で、地質調査技士試験は会社側から受けるように勧められていた。

資格取得に対する意識が低く、「私なんかが資格を取ったって。」とか「勉強するのが面倒だなあ。」などと思っていたため、エンジンがかかるまでだいぶ時間がかかってしまった。正直なところ受験する気持ちになったのは、「私だって受かるんだっ。」ということを周囲の人に見せたかっただけのような気がする。

申し訳ないことに、受験のキッカケに重みが少ない。しかし、何はともあれ受験が決まってからはちょっとは知識欲というものが出てくるもので、参考文献をめくってみたり、過去問に目を向けたり、講習を受けに行ったりと勉強してみようという気になっていた。

まず試験日の2ヶ月前に、会社の上司や同僚から頂いた過去問を初めて解いてみた。結果は、「おいおい、こんな問題分からないよ。」と泣きそうになってしまうほどの惨敗であった。そして、あきらめる方向に意識は傾いてしまったのだった。

そして試験日の1ヶ月前、受けに行った講習会で「意識があれば、お酒を飲んでいても勉強はできる。」との講師の言葉に、目がさめた気がした。そうか、私は本気で受かりたいという気持ちがなかったから覚えようという意識が薄かったんだな、と今の自分の姿が見えた。

目的のはっきりしている勉強は捗るもので、それから試験日までの1ヶ月は、多少の波はあったものの続けて勉強することに成功した。そんな私の目下の敵は、急な仕事とお酒好きの友人、試験前だってのに気を使ってくれない家族(夫)だったけれど……。

具体的な勉強方法と言っても、過去問を解くことと参考文献を読むことだった。キッチンに暗記するページをコピーして貼ったりしたが、これは実用的なものではなく、私は試験を受けるんだという意思を自分や家族にプレッシャーとして与えることにもっぱら活躍していた。ボーリングマシンの原理や道具については、現場管理に行った時にオペーレーターさん

に教えてもらったり意識して見るようにした。

そして、ひとえに私は努力のかいあって、めでたく合格となったわけである（お世話になった皆様本当にありがとうございます。偉そうなことを言ってすみません）。

今となっては、合格したこともちろんうれしいが、受験勉強したことで知ったことがいっぱいあってうれしいというのが大きい。どこかでいつも「私は分野が違うからできるわけがない。」と思っていた自分の甘えや弱さを、受験勉強と合格によって払拭できつつあるように感じる。

地質調査技士合格は、その資格取得がうれしいこともそうだけれど、自分の仕事に対する意識を少し形にできたということで大変価値があると思っている。

合格してからの私の仕事ぶりはと言うと、8時30分～17時30分という我が社の規定する勤務時間に則って、だいたい時間ぴったりに出社し、忙しくなければ時間ぴったりに帰ろうとするということに変わりはなく、仕事が遅いのも相変わらずだが、気持ちに余裕ができたと思う。その少しばかりの余裕に満足することなく、もう1ランク上、また1ランク上へと遅いなりにもステップアップして行こうと思う。

（株）テクノ長谷
猪股　吾朗

1.受験理由

私が『地質調査技士』を受験した理由は、地質調査の仕事に携わるうえで、発注者に対して最低限の信用・信頼を得て頂くこと、また自分自身の商品価値を高めていく必要があること、以上の2点からです。

入社以来、「軟弱地盤」が主な担当物件であったため、身近な「土質」部門を選択し、日頃の仕事内容を踏まえ「現場代理人」の立場で受験しました。

入社当初は現場作業、特に掘進技術（例えば、送水掘りや不攪乱試料採取の原理など）が理解できず相当難儀しました。オペレーターにその都度聞き、その場は理解したつもりなのですが、応用編になるとさっぱりといった具合でした。自分では、必要に迫られないとなかなか腰を上げないという性格を十分に分かっており、このままでは冒頭に述べた目標を達成することができないと感じ、『平成12年度地質調査技士』を受験した次第です。

2.受験対策

一概に受験対策といっても、個人によって千差万別と思いますので、ここでは私なりの受験対策を記載します。

第1の対策は、受験に先立って行われる講習会に参加することで、受講目的は次の2点と考えました。

- 例年の傾向を考えた場合、合格ラインは一定の合格点に規制されているのではなく、一定の合格率に規制されている可能性が高い。したがって、受講して得られる2点は単なる2点ではなく、非常に大きな意味合いを持っている。
- 過去問はあくまで過去問であって、内容を十分に理解・把握していないと応用が利かない。したがって、講習会では苦手分野の補強を優先し、応用編に結び付けることを念頭に置いた。

第2の対策は、過去に出題された問題（マークシート方式、記述式）を解くことで、留意事項は次の2点と考えました。

- 試験中に焦らないために、実際の試験時間を想定して問題を解く。
- 苦手分野を得意分野に変える。一種の自己暗示で、苦手分野に嫌というほど接することにより、何時しか苦手分野と友達になっている。
- 選択問題でサイコロを振らないために、数字

の暗記を怠らない。

第3は口頭試験対策で、私が受験する際に一番重要視したものです。というのは、試験官により質問内容が異なること、質問に対して的確な返答を口頭でしなければならないこと、すなわち一番ぼろが出易い試験と考えたからです。そこで私が取った対策は次のとおりです。

・願書に記載した実務概要の再確認。
・曖昧な言葉で返答を濁さない。

第4の対策は、「継続は力なり」の諺どおりに実践することで、酒を飲んだ後でも構わず勉強することを心掛けました（実際は非常に苦痛でしたが）。この心掛けの結果、苦手分野と親しくなれたどころか、試験に対する慣れ・余裕も生まれたと思います。

3.試験前日と当日

試験前日は二日酔いにならない程度に飲む予定でしたが、現実逃避からか思わず大酒を食らってしまいました。今思うと、余計なことを考えずに済んだのでかえってよかったのかもしれません。

試験当日は、朝から土砂降りというあいにくの天候でしたが、受験地が地元ということもあり受験会場にはなんの支障もなく到着することができました。会場内に入って驚いたのが受験者の多さで、それと同時に合格率の数字が頭を過りました。試験開始が迫るに連れて緊張感と焦りが生じましたが、なんとか抑えて開始時間を迎えました。余談ですが、このとき、「ロッキーのテーマ」を心の中で歌って自分を奮い立たせているもう一人の自分がいました。今思えば、このもう一人の自分に助けられた感があります。

さて、午前の試験の出来ですが、事前に苦手分野と友達になれたことが功を奏し、自分なりに手応えは掴んでいました。そして、午後の試験、すなわち最大の難関と踏んでいた口頭試験がやってきました。質問事項は、これまで携わってきた業務内容に関するもの、現場代理人の立場としてオペレーターに指示していること（安全管理や原位置試験の注意事項）、業務を遂行するうえでの発注者に対する提案事項などでした。質問事項に対して、言葉を濁さないようにと頭では考えていたのですが、場数が足りないのか、度胸不足なのか当初の予定どおりにはうまく運びませんでした。結局のところ、自分自身の経験不足に尽きると痛感しました。

4.合格後

試験が終了して通常の業務に追われていた頃、合格通知が自宅に届きました。自分の中では口頭試験の失敗が脳裏の片隅にあったので、合格通知を見てまさかというのが実感でした。

今回、協会誌『大地』への寄稿依頼を受けて、体験記を書いている訳ですが、合格して改めて感じることは、

・苦手分野と親しく（友達）なれば、仕事をするうえでの道具が多くなり、地質調査の面白味や充実感・達成感が味わえると思います。
・今後は、『地質調査技士』という名に恥じないように、また常に問題意識を持ちながら仕事に取り組んでいきたいと思います。

奥山ボーリング株式会社
戸沢　匡

私自身、入社するまで地質に関しては全くの素人といってもいい状態でありました。入社後、地質調査・災害調査・設計の報告書を作成するという立場から地質・土質に触れてきましたがその難しさに直面し、上司・先輩に教えてもらいながら、時には自分で専門書を調べながらその理解に努めている毎日であります。

地質に関して素人同然であった私は、現場で見た分からない岩を持ち帰っては、「これは何という岩ですか？」、「どのような特性をもっているんですか？」といった質問を上司あるいは先輩にし、岩について勉強してきました。現在でも岩を持ち帰っては上司・先輩に質問する毎日が続いております。

また、出張あるいは休日でも、道路沿いの露頭に自然と目がいってしまうのは職業病なのかなと思いつつも「あの岩は何だ!」と自問自答し、車を降りることもしばしばであり、帰社後、専門書で確認することが当然のことのようになりました。

こうしたなかでこの資格を受験することになり、過去の試験問題を調べた結果、ボーリング技術に関する出題が多いことが分かり、岩・土質の特性を知っているだけでは合格出来ないことが分かりました。そのため、ボーリング技術・安全管理に対する勉強を重点的に行いました。

ボーリング技術に対しては、現場経験が少ないことから何かと不利な条件で試験を受けなければならない不安・あせりが日に日にまし、また、講習会に行った際も周囲の人全員が私自身より余裕があるように見え、不安が日に日に強くなっていきました。ただ、講習会の最後に地質調査技士の資格は、1ヶ月間、計画的に勉強を行うことにより合格率が上がること聞きだいぶ不安が解消され、試験に対する気持ちも幾ばくか楽になったような気がしました。その後は、試験まで、ボーリング技術・安全管理に絞って勉強しました。それというのも、調査技術の理解度などは普段、仕事で接していることもあり、間違うことはないと思ったからです。

ボーリング技術は基本的にボーリングマシンを操作している人間が一番よく知っていることから、会社の上司・先輩に「孔内事故が発生した場合はどういう対処をしているか?」、「逸水防止、孔壁保護はどのように行っているか?」などを質問し、ボーリングマシン・ビット・ケーシングなどに関しては講習会で頂いたテキストを基に勉強し、試験に望みました。

試験当日、試験会場に入ってから会社の上司に言われた一言が頭をよぎりました。「試験に落ちたら許さないぞ!」という言葉でした。"不合格だったらしょうがない"と思っていた私にとっては厳しい言葉でした。

「普通に勉強した人はこの資格を取れる」といった上司・先輩の言葉を思い出し、試験問題を解き始めたことを覚えております。

幸い試験に合格することができた私ですが、会社の上司・先輩から試験に望む姿勢、目標を持つことの重要性について学びました。これは今後の仕事あるいは他の資格試験の受験においても大きな財産になると実感しております。

この試験を受けた時の気持ちを忘れず、今後の仕事は勿論、資格取得に向けて努力していきたいと思っております。

最後に、今後この資格を受験する方々に、"絶対に合格するという気持ちを持ち、ふつうに勉強すれば合格できる"ということをメッセージとして送ります。

明治コンサルタント(株)
畠山　富昌

はじめに、地表踏査について、思うことについて書いてみました。入社した時の私は、大学で地質学を専攻していたため、よく地表踏査に繰り出されました。そのころは、大学の野外調査の延長と考え、とにかく「地質図」を描くことが仕事なのだと思っていましたので、崖錐堆積物等の未固結堆積物はほとんど取り扱わないで、岩相のみやたら詳しく記載していたものでしたから、「大学の地表踏査とは違うよ」と先輩から指摘されました。調査の目的は、最終的にあるところに構造物を作るために、地盤構成や地盤そのもののもっている物性値や力学特性を評価することであり、そのために作成する図面は、「土木地質図」でなければいけないことを教えられました。ただ、岩盤が土工の主体となるようなトンネル調査やダム調査は、特に地質学的見解(地層の生成過程や構造または鉱物学的な解釈)を多分に必要とする

業務であることを、トンネル調査を経験して感じました。地表踏査で大切なことは、業務のはじめの方で行う基本調査であり、対象となる構造物の出来上がりや形状を想定して歩くことが必要だと思います。

地表踏査がいやだなあと思うときは、やはり夏期の藪漕ぎではないでしょうか？藪は背丈が高く、また、蚊やアブ等の虫も多く、出来れば避けたい気持ちになります。露頭が全くなくて、本当は歩きたくないと思っても、藪のその先に露頭があるのではと考えると、藪漕ぎを行わざるを得ません。その先に、重要な露頭が見つかれば、報われた感があるが、露頭がなかった時には、帰りもあの藪の中を歩かなければいけないと考えると、非常に気が重くなります。

踏査の楽しいことといえば、山菜やキノコ取りではないでしょうか？私は、あまり山菜やキノコの種類は知りませんが、タラの目やワラビはよくとります。私の上司は、山菜やキノコに詳しい方が多く、よく一緒に踏査をするときは、山菜の種類を教えてもらっています。たまに、山菜取りが仕事になっているときもありますが。植物の成育域は、土壌（地質）、地下水に影響されます。例えば山菜の分布によりその地山がどのような地盤条件にあるか分かれば（山菜地質学なるもの？）、地表踏査はもっと楽しくなるような気がします。

さて、本題である地質調査技士のことを次に書きたいと思います。私が地質調査技士を受験しようと思った理由は、正直なところ現場管理や掘削技術について、知識が乏しかったため、この機会を利用して、勉強しようと思いました。また、「現場管理」という言葉は、一言に現場管理といってもいろいろあり、自分自身は現場管理をどのように考えているのかという疑問もありました。入社して1～2年目頃は、「どこそこの現場管理をたのむ」といわれれば、単に現場に着いていて、作業状況を見守る？、またはコアの観察、発注者への検尺立ち会いをお願いする程度にしか考えていませんでした。しかし、本来は、計画された作業工程のもとに調査目的を達成できるよう準備や段取りを行い、また、作業の後戻りが生じないように常に次の工程を予測しておく作業ではないかと思います。

受験への取り組みは、ボーリングポケットブックを読むことから始めました。試験までに最低3回は読もうと心に決めましたが、結局2回しか読めませんでした。2回よんだだけでは、「この辺にあんな事が書いてあるな」程度の認識で、ぼやっとしか頭に入っていないので、あとは、過去の問題集を不明な点を残さないように解きました。過去問を解いていると、どのへんの出題が不得意であるかが分かります。私の場合は、「基礎知識」や、「調査技術の理解度」は概ね分かったのですが、現場技術の中の「掘進技術」や「運搬・仮設」については、初めて聞くような名称や質問事項が多く、そのたびにボーリングポケットブックを広げて確認する繰り返しでした。従って、私の試験への取り組みは、ボーリングポケットブックを読むことと、過去の問題集を解き、あとは、日常の現場作業で分からないこと（掘進技術等）は、オペレーターに聞くようにしました。

なんとか、入社して5年目の2度目の受験で地質調査技士に合格することが出来ました。地質調査技士の資格は、建設省が発注する現場では当資格を持っていないと現場担当者にはなれないなど、業務を受注する際に必要な資格となっています。資格を有することは、それなりの仕事に対する適任者と認められることであるから、これからは、より責任感を強くもって、業務を遂行していきたいと思います。